『イエスに応答する心』ヨハネ12:36-43

12:36 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。イエスはこれらのことを話してから、そこを立ち去って、彼らから身をお隠しになった。
12:37 このように多くのしるしを彼らの前でなさったが、彼らはイエスを信じなかった。
12:38 それは、預言者イザヤの次の言葉が成就するためである、「主よ、わたしたちの説くところを、だれが信じたでしょうか。また、主のみ腕はだれに示されたでしょうか」。
12:39 こういうわけで、彼らは信じることができなかった。イザヤはまた、こうも言った、
12:40 「神は彼らの目をくらまし、心をかたくなになさった。それは、彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」。
12:41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであって、イエスのことを語ったのである。
12:42 しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。
12:43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。

●序論
先週の礼拝メッセージで、最初ヨハネによる福音書3:16を引用しました。
　神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。
「だれか」を…という特定の人をささず、「この世を」とイエスさまは言われました。
わたしたちが知り、また注目する「この世」は、現実に争いがあり、悲しみがあり、価値観の違いがあり、そこで憎しみが生まれる。敵意がある、悩みがある、そういう世の中です。正直にゆがんでいるのでは…。

★「神がこういう世を見捨てずに愛された。この世に生きて染まっている わたしたちを愛して、苦しまれ命をも捨てて下さった。」　それがイエス・キリストなのです。
その上で、言われているのです。
「それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」と。
この世で、そこから信じるだけでいいのだ…と言われるのです。

そうして先週の礼拝の最後と今週の冒頭にお読みした御言葉があるのです。
12:36 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。
さらに私は申し上げました、この時、今はチャンスがあるのだということを。
2コリント6:2　「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。」

●本論
Ⅰ．信じない心がある

12:37 このように多くのしるしを彼らの前でなさったが、彼らはイエスを信じなかった。

11章を見ると全く正反対のことも記しています。

マリヤのところにきて、イエスのなさったことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた。（ヨハネ11:45）

はっきりわかる事があります。ここに信じる人も起これば、信じない人も起こった。それがイエスさまの数々の奇跡の御業を、その目で見た人たちの間にあった事実です。。

イエスさまの奇跡さえ見ればだれだって信じるに…というわけでもないのが人です。

わたしたちはともすると、神さまに、自分のために自分の望むことをどれだけかなえてくれるか…、それが信仰の内容であったりします。いつの間にか自分の基準と自分のはかりを神さまにあてている…状態です。

ある婚約式の写真を見せて…

わざわざこの式を行うことで何が変わるのでしょう？　それはお互いの、お互いへの思いを確認し、より一層、お互いを大切にして、信頼を深めていくこと、思いをひとつにしようというような歩みが進められていくことなのでしょう。

覚えてください。★「信じる」ことは、「共に生きる」ことにつながります。

ただ相手を自分の思いどおりになってほしいと思うのとは違う…と分かります。

信じることを通して、いや信じて”ともに生きる”ことを通して、自分の態度も生きざまも変えられていくことを経験するのです。

イエスさまを信じるというときもそうです。

イエスさまを思い、イエスさまの赦しを経験し、イエスさまともにイエスさまの道へと歩みを進めていくことができます。

一方で、信じない人たちは、イエスさまと共に歩むことを面倒に思います。イエスさまから逸れた自分中心の歩みとなるのです。

預言書を見ると、神さまは、そんなわたしの心をすべてご存じだとわかります。

Ⅱ．頑なになる心がある

イエスさまから遡ること700年ほど前の預言者イザヤの言葉を取り上げています。

:38-39 それは、預言者イザヤの次の言葉が成就するためである、「主よ、わたしたちの説くところを、だれが信じたでしょうか。また、主のみ腕はだれに示されたでしょうか」。こういうわけで、彼らは信じることができなかった。

「こういうわけで、彼らは信じることができなかった」。

イザヤはすでに「信じない人」のありさまを、すでにはるか前に預言していたと、ヨハネはここで取り上げています。さらに…

12:40 「神は彼らの目をくらまし、心をかたくなになさった。それは、彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」。

神さまは人を救うためにイエスさまをお遣わしになったはずなのに、ここでは、

「彼らの目をくらませ心をかたくなになさった」とあるのは、矛盾していないか…という疑問を持つ方もおられると思います。
ただこれは、すでに信じない心を持つ人が、自ら招く裁きの形であることをわたしたちは知っておく必要があります。先ほどのヨハネ3:16のつづきには、まずこうあります。

3:17 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。

そう、御心を語った上でこう続けます。

3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。
3:19 そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。

わたしたちを罪と滅びから救おうと遣わされたイエスさま。
この方に対して素直になろうとしないことで、心は、おのずと頑なになっていきま
それは700年前イザヤが予言したとおりであり、イエスさまが、「信じない者はすでにさばかれている」と語っている通りです。
では、それで信じない者たちは、終わったのか…というとそうではありません。
あのルカの福音書15章で出てくる放蕩息子が「本心に立ち返って」父のもとに帰ってきたように、父はその子を迎えてくださったように…です。

Ⅲ．神さまを二の次にする心
ここでは、信じた人が出てきます。でもそれは隠された信仰となりました。

12:42 しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。
12:43 彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。

「なんだ情けない」と思うでしょう？　彼らは信じてなかったわけではありません。
当時のユダヤ人たちにとって、会堂を追い出されることは、人々の交わりやコミュニティ、社会的つながりから排除されることを意味していました。
しかも「役人たち」というのは、いわゆるサンヘドリンの議員たちのことで、その地位や特権、人々からの尊敬をも失うことでもあり、恥を負うことでもありました。

「失うものが大きすぎる、無理もない」。
ただ、もしそれで神からの救い、永遠を失うことであるならば、どうなのでしょうか。
彼らにはそれが見えなかった。実感できなかったというところで、「神の誉れよりも、人の誉れを好む」ありさまを呈したのです。

彼らは自分たちが信じつつも否定に回っているイエスさまが、神からの救い主である…ということにも恐れを抱いています。「そうであるならばどうしよう…」と。
だから彼らは、反対にその可能性を徹底してつぶすために、反抗の意を強めます。

彼らの心は、そういう意味で、さらに頑なになっていったと、いう「信じない者はすでにさばかれている」という道を突き進むことになっていたように見えます。
★わたしたちの心に、イエスさまを素直に迎え入れる心が大切です。
「何ものにも代えられないわが主♪」という賛美を主起こして燃えれば感謝です。

●さいごに
イザヤ書53章全体。イエス・キリストの十字架の受難を指し示す預言。それはイエスさまの十字架と復活の出来事のあと、聖霊によってわかるようになりました。
「ああ、すでにあのイザヤによって預言されていたことがそのままイエス・キリストによって成就したのだと」。　ヨハネももちろんそういう気づきを表しています。
12:41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであって、イエスのことを語ったのである。

ヨハネは、預言者イザヤは、すでに「イエスの栄光」を見ていた！と表現しています。
「イエスの栄光」、それはまさしくその預言のとおり、救い主キリストが、わたしたちの罪のために苦しまれ、身代わりとなってくださった…という姿そのものです。
すでにイエスさまのその受難の歩みは、定められていた。
実際にイエスさまがわたしたちのために恥を受けて苦しまれている姿を、イザヤは神さまから霊的な啓示（ビジョン）をいただいて、実際に「見たからであって、イエスのことを語ったのである」と表現しているのです。
それは神さまがわたしたちを救うために、愛をもって独り子を遣わして、あの十字架に向かわせてくださった・・・そういう物語なのです。
神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ3:16）

だから申し上げます。私たちの神さまの愛に対するかたくなな態度や心、そのすべては、神さまの側で、もうご存じです。
それでもなお、忍耐をもって、キリストを示し、十字架を示して、わたしたち滅びからの救おうと望んでくださっている、それが神さまの物語なのです。
イザヤ53:11(LB)　彼は、自分のたましいが苦しみもだえた末、神のみわざが実現するのを見て、満足します。
「わたしの正しいしもべは、このような苦しみを経験して、多くの人を神の前に義とする。彼が人々の罪をすべてになうからだ。」

そうしてこう招かれています。
「光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」(:36)。